

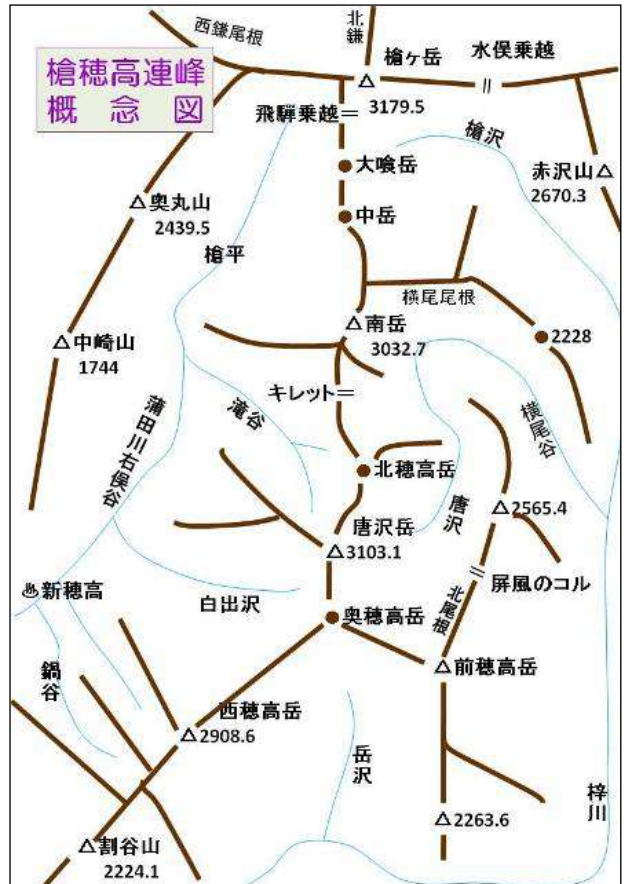
# 踏み跡 <My Mountains>

北アルプス	キレット越え(蒲田川から入り槍穂高縦走)	No.111
-------	----------------------	--------

五龍岳、八ヶ岳と並んで日本三大キレットに数えられるのが、槍と北穂の間に落ち込む大キレット。  
 キレット越えとは、このキレットを通過する縦走すなわち槍から穂高への縦走のことである。  
 執念深く狙い続けてきた恩田と意気投合した大プラン。  
 仕事の関係で偶然できた三連休を利用して、二泊三日で一気に槍穂高の縦走をやってしまおうという計画。  
 このスピードアップ縦走のための道具は、我々がこれまでに考えてきた登山革命と称する様々なアイデアの結集であり、殆どの点で実験的要素も含まれている。  
 装備として、手製の軽いテント(ツェルト)950g、手製の軽い寝袋(セミシュラフ)900グラム。  
 食糧として、恩田の苦心作「オンダペミカン」(詳細は後述)、ザックはポケなしアタックザック。  
 土曜日の午後出発、火曜日の夜帰宅、帰宅後すぐに夜勤に出勤という猛烈縦走しかも予備日はない。  
 この山行中に私は山行日数通算200日を迎えるというおまけもある。

## ◆オンダペミカン

野菜各種にひき肉や缶詰のコーンを混ぜて調理したものを一食分ずつに袋詰めして冷蔵したもの  
 水を加えて加熱すればシチュー(スープ)となり最悪の場合そのまま食べる事もできる  
 西丸震哉氏の西丸ペミカンをまねたネーミング



## 昭和43年7月20日 天気 快晴 <東京→名古屋>

東海道線を利用して山へ出かける。東京在住の者にはあまり考えられないことであろう。三年前の南アルプスの帰りに静岡から乗った二時間半以来二度目の体験になる。東海道線はどことなく雰囲気が違うようで、我々のような薄汚いでたちの乗客は場にそぐわないらしく、周囲の視線も痛く冷たい。  
 まだ日の高い午後4時30分離京、東海4号大垣行。横浜を過ぎると電車はほぼ満員となり、熱気で臉が重くなってくる。「今回の山行の成功は、初日のコンディションにかかっている」との認識から、東海道線の車中で充分に寝ておこうということになった。  
 目が覚めると小田原、箱根の山奥から太く長い雲の帯が海に向かって、あたかも海と山とを結んでいるかのような光景。初島の後方、積乱雲の彼方にうっすらと伊豆大島の姿、伊豆半島、房総半島、碧い海と空、入道雲。昨日梅雨明けを迎えたばかりの相模湾の景色はさわやかそのもの。  
 横浜で買ったシューマイをおかずにして、たぬき(銀座たぬきや)のおにぎりをぱくつく。  
 東名高速道路、国道一号線、新幹線、海辺のテトラポッドの群れ、静かな海、岩淵、蒲原、静岡。  
 夏祭りらしい花火の花が車窓一杯に映り、ドーンという音がいかにも夏の夕方らしい。また昼寝(?)。  
 目が覚めたら熱田、あと五分で名古屋というところで目が覚めた。  
 名古屋22時06分、なんと蒸し暑いところだろう。上野や新宿と違って構内の様子が理解できていないので、勝手にわからない。しろがね2号は23時50分に11番線から発車する。プラットホームに荷物を並べて、夏の夜のひとときをしばし散歩としゃれる。地下街、大きなビル、パチンコ屋、映画館……。パチンコ屋の店内が広くデラックスなのだけが目立つ。  
 しろがね2号は循環急行、名古屋から岐阜、高山、富山、米原、岐阜、名古屋と循環する。  
 上りの急行大和が出て行った後隣のホームを見ると、大阪発長野行列車が満員の客を乗せて停車している。考えてみると、名古屋という所は山へ行くのに実に便利な所だ。放射状に伸びる鉄道のどれに乗っても山に

## 踏み跡 <My Mountains>

出かけることができる。恵那山、木曾御岳、乗鞍、北アルプス、中央アルプス、南アルプス、大峰山方面、御在所、加賀白山、比良、・・・・。日頃自分が住む町のことしか考えたことがないが、今回あらためて名古屋の地理的条件を再認識できた。

紀伊勝浦行の急行が出た後、急行しろがね2号は入線。我々はこちらであらたな事実を発見し、驚いた。ほぼ座席一杯に乗った乗客が実に静かで行儀が良い。乗車直後は、阪神、京都、名古屋などの言葉のお喋りが聞こえていたが、列車が尾張一の宮を過ぎる頃になると車内はしんと静まり、まだ眠りに入っていない客席の語らいも遠慮がちな小声になってきた。上野発23時58分秋田行や新宿発23時45分長野行は、ワイワイガヤガヤに酒と歌、トランプや麻雀、バカ話・・・・。

23時50分発しろがね2号は、我々が抱えている夜行列車のイメージとはかなりかけ離れた雰囲気尾張平野を走り抜けていた。岐阜を過ぎると急に山間に入り、車窓の風は昼の暑さなど全く思い出せないような涼しさになって・・・・。

### 昭和43年7月21日 天気 快晴 <高山→新穂高温泉→飛騨乗越→南岳>

高山着3時45分。満員の駅前広場から乗鞍、新穂高あるいは平湯、上高地へと向かう登山客が整理券の番号に従って順に押し出されていく。まだ夜の明けぬ高山の街の中を、バスのエンジン音だけが活気のある動きで山に向かって進んで行く。

バスの車内はしんとして皆眠りに入っている。飛騨の京とも言われる高山の景色を見ておこうと、必死で車窓に目をやっていたが、どうやら眠ってしまったようだ。気がつくともう道路は凸凹道、だいぶ山の中に入ってきた。揺れている車内で朝食(大事に持ってきたトマトと牛乳500ccそれにクロアッサンを少々)。新穂高温泉6時30分着。蒲田の方から上って来たタクシーを捕まえて、白出沢の出会いまで入る。タクシーを降りたところはもう車が方向転換できないような、両側からの灌木にすっぽりと道が隠された狭いところ。ここから歩き始める。

滝谷出会いの針葉樹林の中で昼食。滝谷は井上靖の小説

「氷壁」で有名になったナイロンザイル切断事件の舞台になったところ。出会いの分岐点を見ると、小説のイメージが先入観としてあるせいか陰気な死の匂いがするように感じる。木陰の木の根に腰を下ろして47分間の食事。

木々の緑、林の中の腐った木の根とそこに寄生する苔類、その上を照らす木の葉隠れの太陽の光。さらに我々の青いアタックザックと黄色いポロシャツ、赤い帽子。食事はクロアッサン3個半、牛乳500cc、レモン半分、トマト



一個、氷砂糖少々、オンドペミカンと名付けたコーンミックス。

滝谷の出会いから40分で槍平に到着。大喰岳から奥穂高岳までの西歐的な岩山の連なりが一望できる。まるでよその国へ来たような風景にしばし見入ってしまう。(上の写真)

小屋で水を飲んですぐに出発。日はもう頭上に近付いており、これから続く3000mの飛騨乗越までの長い登りがいささか思いやられる。

すでに水のなくなった蒲田川右俣谷は、登るにつれて植物も小さく可愛い高山植物が多くなり、モレーンを越えてカールに入ると雪渓もあらわれて様々な角度から垂直分布が感じられる。西に目をやると笠ヶ岳、錫杖岳、抜戸岳、弓折岳と飛騨の名山が残雪で化粧した姿を見せてくれる。

水の音から遠ざかってからの四時間は実に長い。前方に西鎌尾根が鋸歯状の岩峰をくっきりと見せ始め、綾線の近さが感じられると、心は焦るがなかなかカールから抜け出せず、3000mの山の大きさをあらためて感じさせられる。真上からの直射日光に照らされて、水気のない沢を登るのは全くの苦行である。

海拔3000mの飛騨乗越、日本で一番高い峠。ヨウカンの甘さが口にとろけるようで、下から運んできた水がわずかに一口ではあるが旨い。



南岳から槍を望む

## 踏 み 跡 <My Mountains>

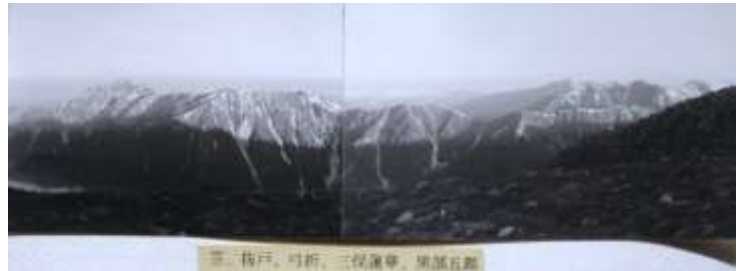
ガスが湧き始めた槍を眺めながら一時間半の休憩。雪は予想以上に多く、槍沢は勿論大喰、中岳への稜線も梓川側に大きな雪渓を残し、ほとんどが稜線上にまで達している。これだけ雪が多ければどこでもビバークできそうだ。

明日は早朝のうちにキレットを通過することで混雑を避けたいので、今日は南岳の天幕場まで頑張ることにする。3000mの尾根に達した後での起伏はさほどではないのだが、夜行列車で入り直射日光を浴びながらの一日はかなりの疲労を産んだ感じがする。槍から南岳へのわずかな行程もグンと長く感じる。それに腹も減ったし……。

南岳天幕場に17時30分に到着。いやはやよく歩いたものだ。小石の多い平坦地を見つけて幕営。すぐに夕食の支度に入る。夕食はオンダペミカンのスープにしてその中に餅。20時20分就寝。

### 昭和43年7月22日 天気 快晴 <南岳→キレット→北穂→奥穂→西穂→西穂山荘→水場>

起床3時15分、星空が素晴らしい。山の一日の感激はまず星空の煌めきで始まる。それは眠気を覚まし、今日の一日のファイトの源にもなる。アメリカ人のコーヒーという感じだろうか。



朝の南岳天幕場から

(左：北穂・奥穂方面 上：笠・三俣蓮華・黒部五郎方面)

バーナーの火着きが悪く、食事準備にだいぶ手間取ってしまったが、5時半出発。

朝のこととて足取りも軽く25分でキレットの最下部まで到達。日本三大キレットなどと騒ぎたてられると意識してしまうが、実際に自分の足で確かめてみるとさほどのものでもない。「大キレット」というほどの大きさも難しさも感じなかった。むしろ我々はキレットから北穂への登りの方を心配している。本日最大の登りで、しかも朝一番の登りでどのぐらい体力を消耗するかということが心配である。

ところが、心配をよそにさしたる苦渋も味合わずに7時40分に北穂高岳に到着。富士山、加賀白山等かなり遠くまで目に入ってくる。奥穂も前穂北尾根も、やあやあと声をかけたくなるような近さで、しかも見上げれば文句のつけようのない快晴の空。

北穂からは左に涸沢を見下ろしながら唐沢岳、穂高小屋、奥穂高岳。このあたりはあまり起伏もなく一番のんびりした山歩きが楽しめる場所だ。

穂高小屋で昼食。これから西穂を越える

ために必要な水を補給。蛇口の横に「いくらでもけっこうです」というようなことが書いてある。料金箱に10円入れて満タンに。奥穂の右側を飛行機が細く白い軌跡を描いて去っていくのを眺めた後で出発。

奥穂、ジャンダルム、間岳、西穂、この間を一番難しい区間とみて来た。一日のうちでは体力的に峠を越す午後、しかも岩礫の不安定な、ほとんどが浮石と言ってもいいような足場。登山路はジャンダルムを左から巻いて通過するようになっている。ザックをデポして、空身でジャンダルムに挑む。

ジャンダルムの天辺で緊張感の中でのひとやすみ。飛騨尾根を何人かの人が登って来て、二人だけの静けさが破られたので、デポ地点に戻り縦走再開。

天狗のコル、間岳、西穂、この間は神経をすり減らすピリオドだ。小石を盛ったような岩稜で、「浮石をなだめすかしながら歩く」ような、肩が凝る歩き方が続く。

穂高小屋を出てから五時間余、緊張の後の西穂到達はうれしさがこみあげてくる。ヨウカンを食べる最後の踏ん張りを誓い合い出発。



## 踏 み 跡 <My Mountains>

低い山はガスに覆われ始め、焼岳だけが時々姿を見せる程度になってきた。もう夕暮れが近い、ガンバレ。独標は、落雷にやられた松本深志高校のパーティに捧げられた花と線香、そして無造作に積み上げられたお菓子の山。一種独時の雰囲気醸している。11人の若き御霊達には大変申し訳ないことであるが、我々は空腹の絶頂にあり、喉から手が出そうな状況になっていた。ここにいると手が出てしまうかもしれないので、長居は無用。

西穂山荘17時45分、やっと着いたという実感。久しぶりに樹林帯に入り、風の弱さが物足りない。汗にまみれたシャツを脱ぎ棄てて、裸で幕営の準備。水場を探したがどこにも見当たらない。

小屋の人に聞いてみると、「水場はこの辺にはない、水は小屋の中だけ、1リットルタンクに一本50円」もし二人でご飯とみそ汁を、今晚と明朝と・・・200円に、明日の行動用にさらに100円・・・。考えてみたら驚きよりも情けなくなってきた。ここまで来てなおお金、お金、お金。しかも3000mの奥穂の小屋では「お金をいくらでも・・・」と好意的なのに。仮に金を払ってここに泊したとしても、我々が二日間頑張った苦しくもまた楽しかった思い出に不愉快な汚点が付いてしまうような気がした。

張りかけていたツェルトをたたみ、残り少ない一口ほどの水を半分ずつ分け合って飲み干し、再びぬれたシャツを着こんで先へ下ることにした。何やらやるかたのない憤懣に支えられて。

一度は足を投げ出した疲れた体で、上高地をさして二人とも無言で歩き続ける。小一時間歩いたところできれいな水がたっぷり流れる水場に出た。時計を見ると19時。時々刻々闇が押し寄せる中で幕営。

ツェルトに入りほっと一息ついたらもう真っ暗闇になってしまった。にわかに疲れが出てきて飯の支度も億劫になってきたが、食欲に勝る欲はない。一時の休息の後夕食の準備を開始。恩田は最後のピリオドの無理がこたえたらしくダウン。

食事の後、大事に大事にこの日のために持ってきた線香花火を出して花火大会。カラスライドに収めたりで結構楽しく最後の夜を楽しんだ。

今回の山行で登山開始以来の通算日数は200日になった。全力を注いだ今回の旅で200日目を迎えられて、嬉しいことこの上ない。21時30分就寝。

### 昭和43年7月23日 天気 快晴 <水場→上高地→松本→帰京>



上高地近し、もう少しでゴールイン

起床4時半、眠いし体中が痛い。体の痛さは、緊張感から解放されたために強く感じるのだろうか。バスが混まない内にとまって早起きした。何せ今日は帰宅後に夜勤が待っている。

6時半ツェルトを撤収して出発。上高地バスターミナル着7時40分。

恩田は夏休みを利用してこれから乗鞍方面へ入ると言う。月見うどんで成功を祝した後バスを待つ行列に加わった。岳沢、奥穂・・・、我々が奮戦した岩稜は朝の光の中でまるで何もなかったかのような穏やかさ。

バスは9時15分に発車、窓越しに恩田とガッチ

リ握手。いやはやお互いによくやった。まったく悔いるところはない。

釜トンネルを過ぎてしばらくは涼風があるが、沢渡を過ぎると暑い、暑い。やはり山の上の方が住み心地よさそう。これだけのことができたんだから、今年はどうなことでもやれそうな、そんな気がしてならない。3000mの稜線を思い出しながら無言のひとりごと、そして居眠り。

急行第2白馬は、塩尻、辰野、上諏訪、・・・、奔馬のごとくひた走る。

以上